

『珠洲に帰ってきてきつよよ』と父に言える地域に

(40代・男性)

珠洲で生まれ育った男性は、半身が動かない父と二次避難。「水が復旧したら戻ろう」と話していたものの未だ不安が大きく、父のみが現在も二次避難を続けているとのこと。



避難所では、勉強したくてもできなかった (10代・女性)

昔のままのこつとる、そこがいいなあ

と言われる能登がいい (70代・女性)



「奥能登は、神様から与えられた土地。がけ崩れもすべて人間のせいだと思う。人間が住みやすいように山を削ったから被害が出ている。わたしはね、新しいものをつくるのには反対なの。美しい自然と古い家々と、ここにしかない歴史。あるものを大事にする。ないものをつくるより、それがわくわくを感じないかと思っている」と話された野々江町の元教員の方も。

正院町に住む中学生は3月まで避難所で生活。「子どもが遊ぶスペースや学習用のスペースがなく、学習したい人の環境がなかなか整わなかった。したい人が勉強できるようにしてほしい」と話しました。

避難所の管理は手書き・・・、また同じことはしたくない

(40代・男性)

「誰がどこに避難しているのか、必要な情報は届いているのかわからなかった。同じような震災がまた起きた際に、マイナンバーカードを拠点でかざして居場所の履歴が残り安否確認できるようなシステムなどが必要では」という意見もありました。

「能登はやさしや〜」、だけじゃなく強かった、と言えるように

(40代・男性)

江戸時代に加賀藩の武士が日記に残したと言われる、「能登はやさしや、土までも」。「仕事がない、給料が低いと帰ってこない人がたくさんいるが、親世代が伝えてきた負の呪いのようなもの。こんな風に働いている人もいるんだ、に自分になりたい」と話す、Uターンして自営業を営むお父さんも。

ボランティアのおかげで、なんかできそうと思えた

(30代・男性)

外浦の馬繰町に住む男性は、「友人が生き埋めになり、孤立して物資がないなど非常にきつかった。自分らで崩れた家を片付けようと思ってもため息が出て動けない中で、ボランティアが片付けてくれたことがありがたかった」と話しました。

一方、能登全体で見るとボランティアの数が足りてないこと、ボランティアの宿泊先も足りていないことなどの声も多数ありました。

分散型インフラ

による自立・自律した
コミュニケーションを

断水で、避難所でのトイレが衛生的に使用できず大きな課題に。一方で、山の湧き水を使って地域で給水が行われた例も。地域ごとに小規模の上下水道や発電設備があれば、震災があっても地域で自立していけるという意見がありました。



(40代・男性)

のと未来 トーク 珠洲市

2024.4.6

会場：石川県立飯田高等学校
参加者：60名



『何が欲しい?』は困る、 事業再開のために

(50代・女性)

地元の道の駅で働

く女性は、「クール便が来ず、EC等も再開できない。前を向いてやろうとしている事業者を集めて、本当に何が必要かヒアリングしたら、個々で課題が違うことがわかるはず。事業再開のための次のステージを助けてほしい」と話しました。

若者はみんな 祭

が (10代・女性)

したい!



「最期まで住みたい」 をどう叶えるか

(50代・男性)

高齢者が多い地域であり、「次に何かあった時も安全に逃げられる場をどう作っていけばいいか」「最期まで住みたい高齢者の希望をどう叶えていくか」などの声が多数ありました。

蛸島町で被災し、2次避難先の白山から帰ってきて参加してくれた高校生は、「蛸島には早船狂言があって、外に出た人も絶対帰ってくる。二十歳が近づくにつれて若者はみんなわくわくしてその日を待っている。この祭りをなくしたくない。あたしは外部の人とつながりをつくって、「珠洲はこんないいところがあるんやよ」というのをいっぱい人に伝えたい」と話しました。他にも、「祭りがあったから、地域の人たちの顔を知っていて、助け合うことができた」「神社仏閣の修繕への支援が必要」という声も



女性の視点を 安心安全に 活かしたい

(50代・女性)

「女性が炊き出しや清掃、高齢者の介護などで駆り出され、避難所生活での負担が大きかった」「地域の老人ホームも60名ほど退職者がおり、残った人が無理をしながら頑張っている」「防災の面でも女性の方がトイレのために夜に外に行ったり、ストレスが高かった」など、女性の視点をもっと避難生活や安心安全のために活かしたいという声が複数ありました。





目の前で魚をさばける かつての朝市を

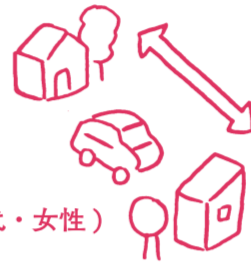
(60代・男性)

「数年前から衛生管理が制度化され、目の前で魚をさばけなくなって出店者が減っていた。でもばあちゃん
がほっかむりを被って、リアカー引いて、包丁でさばいて、というのが輪島の日常。かつての朝市を取り
戻すチャンス」と話す、江戸時代から輪島塗のお店を営む漆器屋さんも。平安時代から物々交換が行われ
ていたり、儲けるだけでなく、みんなで分け合っていていこうというところの豊かさが流れていた朝市。
「不便で手間のかかるものが残っているのが魅力」「高校生と朝市英語ガイドを復活させるなど、盛り上げ
ていきたい」という声が集まりました。

千枚田、地元の人たちが 修復を

(40代・女性)

世界農業遺産のシンボル・白米
千枚田も、地面に深い亀裂が入
り、大きなダメージが。
景観を復旧するためには急いで直さ
ないといけない声もあるけど、
未来を考えながら地元の人たち
が時間をかけて修復するのも大
事」という意見が出ました。



どっちか選ぶのじゃなく、 二地域居住できたらいい

(50代・女性)

「他の自治体に二次避難していた若い子達が、先日こっちに帰って
きてほんとうにほっとした顔をしていた。地元とつながりがあると、
精神的に安心できるはず。二拠点とかで、選択肢を増やして
あげることが大事なのではないか」と話す女性も。行き来のために
道路の車線増加や空港の増便などのアイデアも出ました。

子どもも大変、学校のみんなが 輪島に戻れる住宅を

(10代・男性)

全校で10人ほどの小さな小学校に通っている11歳の小学生。
「家が傾いたり、子どもも大変。仮設住宅にまだ入れず二次
避難から戻ってこれない子も、早く帰ってこれたら」と発表。
「子どもたちが交流できる場所があればもっと楽しく過ごせ
るのでは」とも話しました。

輪島塗の後継者を増やす ためにも、オープンに

(10代・女性)

「石川県に住んでいても輪島塗をしたことがない。やっ
てみたい。工房もクローズドな雰囲気で見えたいが、
もっと制作風景などが見れるようになれば」と話す10
代～30代の若者もいました。



輪島塗は総持寺に全国から修行に
来て来たお坊さんが、全国に持
ち帰って広まったと言われる

もとに戻すのではなく、 新しい事業の為の補助金があれば

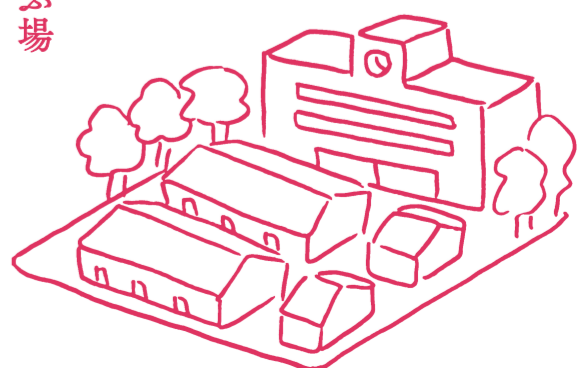
(40代・男性)

飲食関係の経営者からは、「震
災前と同じように復旧しても
しょうがない。新しい事業が生
まれる補助金があるなら」「2
～3年は、これまでの採算を生
み出すのは難しい。頼りたくな
い気持ちもあるが、雇用調整助
成金なども必要ではないか。事
業再建には雇用を進めないと」
という声が。

仮設住宅を 建ててもいい？ って誰か子どもに聞いた？

(40代・女性)

保護者世代の女性たちからは、「危ないところばかりで子どもが遊ぶ場
所がない。ストレスを発散する遊び場が必要。家の中では限界がある」「公園や学校など、
子どもの遊び場に仮設が建ってしまった。すぐ建てられる場所はなくしょうがなかったと
は思うけど、子どもばかりに我慢を強いているのでは」という声が上がりました。



「死んでも離れたくない」住民がたくさんいた

(40代・男性)

輪島出身で、Uターンして医師を務めている男性は、「絶対に、死んでも(この土地を)離れたくない」と話す住民
たちの声を聞きながら、紛争、戦争レベルの現場でどうすべきか葛藤してきたそう。DMAT(災害発生直後から
活動できる機動性を備えた医療チーム)も東日本大震災の倍以上となる1000以上のチームを能登へ派遣してい
たものの、広域に被害があったため、現場感覚では医療リソースが全く足りていなかったそうです。自治体だけで

対応できる規模ではないため、次回以降の災害に備
えた医療インフラの整備の検討が国でも必要ではな
いかと提案しました。



のと未来 トーク 輪島市

2024.4.7

会場：石川県立輪島高等学校
参加者：75名



一次産業の復興が第一、 水産業の人たちが

(50代・男性)

大阪から輪島に移
住して和食料理店
を営むも、今は店をあけることができず、金沢へ出稼ぎしてい
るという男性も。「輪島は朝市だけじゃない。農業や水産など
1次産業が復興しないと、観光は無理。金沢も輪島漁港に生か
されてる。金沢に出稼ぎに出ている水産業の人たちがたくさん
いるので、戻れるようにしたい」と話しました。

門前に仮設商店街 をつくりたい

(30代・女性)

「2007年にも地震があり、2021年にやっと完全復興宣言したと思ったら、3年経たずにこうなった。
總持寺の被害もひどい。また1からやり直し・・・と心が折れそうになった」と話す、總持寺通りの
商店街で働いているという女性。それでも、門前に仮設商店街をつくって店を開ければ少し希望が
できてくるかも、と考えているそう。「輪島の中にも様々な背景の地区があり、それぞれの地区にあっ
たまちづくりができれば」「私も4年前に金沢から育った門前へUターンしたが、金沢に働きに出
ている若者が戻ってこれるようにしたい」と語りました。

黒瓦の綺麗な街並みを残したい、 けど・・・

(40代・男性)

門前に住む男性は、「街並みが綺麗だ
ねと言われるけど、瓦が重いので家
が潰れるんじゃないかという話も地
元ではあり、正直怖い部分もある。
綺麗な街並みを残したいけど、瓦で
潰れたくはない」と理想と現実につ
いて語りました。軽量化するなど、
現代にあわせていく必要もありそう
という話が出ました。





「まんでまいぬ」のヨバレが大事

公民館の館長をしてきたという男性は、「祭りそのものはもちろん、ヨバレが大事。家族で食材を集めて、みんなでつくって、『まんでまいぬ』『何つこうたん?』と話すのが、

譲れない

(40代・女性)

自然との共存

「能登と言えば自然との共存。自然ではなく人間ベースの復旧復興になってしまうと、能登の暮らしてはなくなるのでは」と話す、東京から移住してきた女性も。水道が使えない中でも鮮魚店をまわって魚を用意して「田の神様」へご馳走をお供えする民間祭礼である「あえのこど」を行った家もあったそうです。



学校を統合すれば、みんなで遊べるのでは

「子どもたちが町から出ていくとは残念だがリアルな問題。一学年5人というところも少なくなかったが、発災後に転校した子もいる。統合することでみんなで遊べるようになるのでは」という提案も。(50代・男性)

発酵食・魚食文化

を、生業として次世代に (40代・女性)

「能登の歴史的側面や独自の食文化をきちんと整理して、生業につなげていけないか」という声も。「二次避難で、食文化や能登の知恵が流出してしまう。次世代に伝えるためにも、高齢者に聞き書きして郷土料理の本をまとめたい」と話す方もいました。



ボランティアなかなか来ず

つらい (40代・女性)

「弱っているときは崩れた家にいるだけで涙がとまらない」と話す、子育て中の女性も。外からのボランティアが来ないこと、支援が多い地域とそうでない地域があることなど、「自分たちがながいがしろにされていると感じて辛い」と話しました。

自分にできることがあれば、やりたい (10代・女性) 地域みらい留学を活用して、4月に能登町に来たばかりという高校生も参加。ご家族も行くことを応援してくれたといいます。「こにきて、自分にできることがあるならやってみよう」という気になった。人の温かさが能登の良いところ」と話しました。

「地震のせいで何もできない」経験を子どもたちにさせない

「地震の後、子どもたちひとりひとりに安否確認をするのがとても怖かった」と話す高校教師3年目という男性。「登校できたときは、同級生と久々に会えた嬉しさなどで、大人よりも元気だった。『地震のせいで何もできなくなった』とならないようにしていきたい」と語りました。(20代・男性)

能登でしかできない経験を、インバウンド客にPR

(40代・男性)

「漁師がとってきた魚をその場で選んで、客が料理人と一緒に宿泊施設でさばいて料理して朝ご飯にするような体験ができないか」という声や、「祭りを見るだけでなく、観光客も参加できるようなものにしていけないか」という声が、複数あがりました。

のど未来 トーク 能登町

2024.4.13

会場：石川県立能登高等学校
参加者：71名

魚が捌ける ようになって、嬉しかった

宇出津で魚屋を営む男性は、「水が使えず、しばらく魚を捌けず大変だった2月になると『魚が食べたい』という人が増え、移動販売を週1回はじめた。魚を捌けて本当に嬉しかった。この震災で改めて仕事のよさに気づいた」と話しました。一方で、避難のためまちから人が減っており以前のように店頭では売れず、ECなどを活用して模索している状況も。

(30代・男性)



を、再開できないか のと鉄道

廃止前は、高校生・おじいちゃんおばあちゃんの利用者が多かったというのと鉄道。2005年に廃止になり、進学のために下宿せざるを得なくなった高校生などもいたといいます。「震災前以上に、今こそ高齢者や子どもの精神的にも必要なのではないか」「上下分離方式で経営負担を下げて再開できれば…」という声がありました。

(40代・女性)



AI 技術 × のど = 課題解決先進地 (40代・男性)

「震災の影響で人口減が加速して、これから日本で起きる課題が、先に起こっている。AI技術なども活用しながら能登でモデルケースを作れば、日本中、世界中の課題を解決するヒントになるはず」と話す方も。



あばれ祭り

で心がつながっている (60代・男性)

「子どもたちはこの地域が好きなの理由を、1番目が祭り、2番目は空気と答えます」と話す、地域で長く教員を勤めてきたという男性。「働くところがないと地元で働く子は3/4割になってしまったけど、正月やお盆よりも、祭りだけは絶対帰ってきてくれる。祭りにつながっているんです」と話しました。今年も7/5〜6に「あばれ祭り」の開催が決まっています。



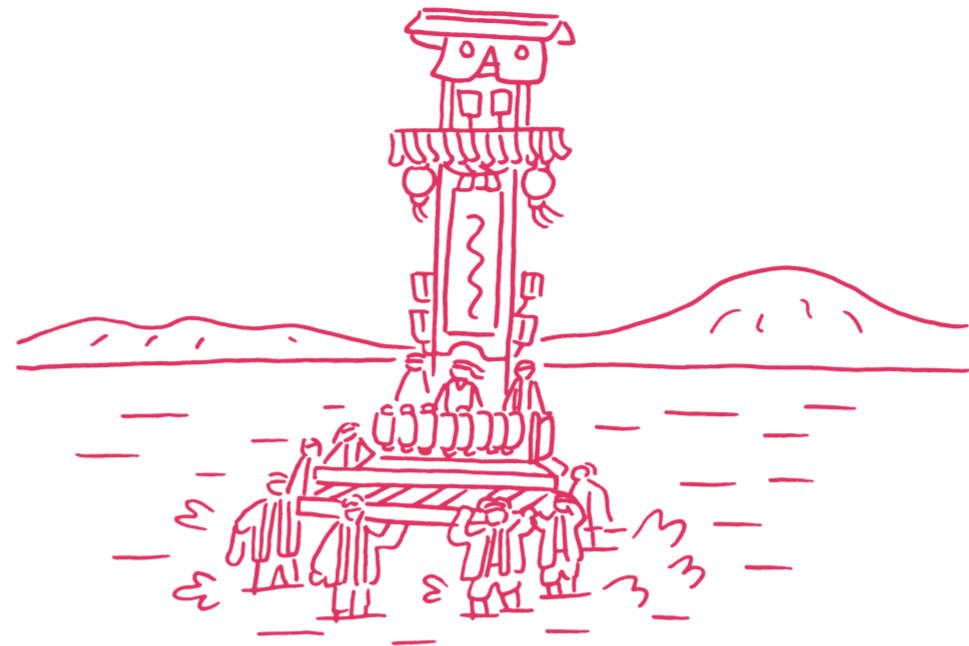
教員・公務員も、被災者のひとり

「地震後も、『学校のために来い』とのことで、仕事に向かった。家も片付けな
いとして、家庭と仕事のバランスが非常に大変だった。自分達も被災者。他の先
生も大変だったはずなので、振り返しをして改善をしていきたい」と話す教員
も。「奥能登の交通の便を考えると、単位制で在宅でも学べる新しい仕組みも
必要では」というアイデアも出ました。(50代・男性)

奥能登ゲートシティとして、

ライドシェアを

「のと鉄道も再開し、穴水は鉄道によっていけ
る半島最北端。今は運転できない外国人観光
客などはこの先に行きづらい。2市2町のハ
ブとなる立地を生かして、ライドシェアやマ
イクロバス、レンタカーなどを充実させると、
能登全体の観光にもプラスになり、穴水の仕
事づくりや地域住民の利便性にもつながるの
では」という声がありました。



祭りの復活

で、ひとの繋がりが復活する (40代・男性)

避難所で炊き出しを行っていた男性は「炊き出しをすごく喜んでもらえ、穴水の中
の地域・集落を超えて何かに取り組んだ初めての経験になった。最近は避難所が閉
じて集まる場所がなく、話すタイミングがなくなった。お祭りなどを復活する過程で、
若い人と高齢者が集まれるような場が欲しい」と、話しました。

能登にしかないもの

を、世界へ
売り込む

能登の樹木を日本全国や海外に輸出しているという造園業を営む経営者は、
「のとギリシマツツジなど、日本一、世界一になれるものがある。能登の地
域資源に携わり、産業にしていくな人ももっと増えれば」と話しました。(50代・男性)

のと未来 トーク 穴水町

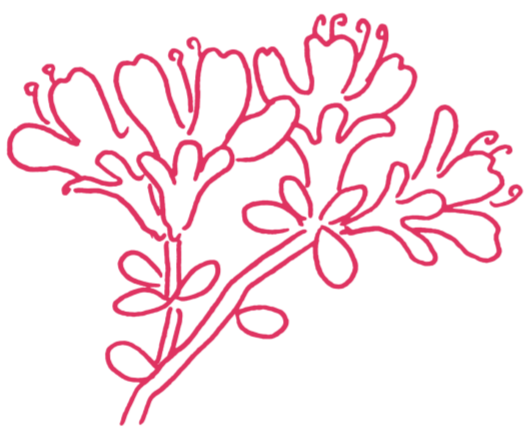
2024.4.14

会場：石川県穴水町立穴水中学校
参加者：30名



地震で、農業を続けられなくなった家も

代々引き継いだ栗園を営む男性は、「30 軒あった栗園が、高齢
化によって 10 軒になっていたところに地震が来た。続けられ
なくなった家もあり、他の栗園も管理することになった。穴水
には 100 ~ 200 人くらいの集落が点々であるが、高齢化率も
高く、集落内だけで何かをするのは難しい。集落の壁を超えて
協力し、穴水と言えばコレという魅力をつくっていければ」と
話しました。



ボラ待ち めぐら

活用できないか

(60代・男性)

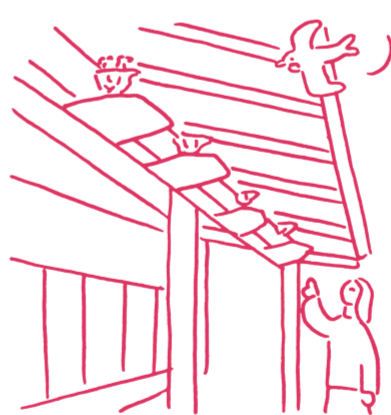
江戸時代から伝わる漁法と言われる、ボラ
待ちめぐら。地域にはまだ、めぐらを建て
て漁をしていた経験がある漁師さんもいる
そうです。「穴水と言えばボラ待ちめぐら
だが、ただあるだけになってしまっている。
もっと体験等に活用できないか」という声
もありました。



困難を抱える人が 避難所に残らざる を得ない

(40代・女性)

「水道が復旧して福祉施設で暮らす日常に戻れた方も
いるが、施設もお金がかかるので、生活保護受給者や
家族から見放された高齢者は避難所にまだ留まってい
る、どうしたらいいのか」と、避難所を運営する中
での厳しい現実についても声がありました。



つばめ調査で、自然に コミュニケーション

(50代・男性)

木造家屋も多く、軒先につばめの
巣が多いという穴水。巣は縁起が
よいと、春先になるとわざわざ窓
を開けて来訪を待つ家もあるそ
う。各家につばめが来ているかの
調査をずっと続けてきたそうで、
今年も実施して近所の人と話す機
会になればという話も出ました。

地域のハブになる、 プロ民生委員を

(40代・女性)

「ハブになる人が地域にいるかどうかで、避難生活の質が大きく変わった。民生
委員は無償で、なり手の負担が大きくしんどかったが、地域にハブとなる人
は必要。プロとして有償で働く人を育成する仕組みをつくり、移住者の生業な
どにできれば」という声があがりました。

ボランティアが 来やすい仕組みを つくりたい

(30代・女性)

「ボランティアのマッチングがネックに
なって、なかなか来てもらえない現状があ
る」「個々で行くより、企業で取りまとめ
て派遣したり、研修等にもできるかもしれ
ない」など、東京から参加した企業ボラン
ティアも交えた意見の交換も。

私たちが、この厳しい 半島に住む意味は何か

(60代・男性)

「厳しい環境の半
島地域に住んで
いたのは、仕方
がないからとい
う部分もある。
ここに住む意味
は何か。ここに
付加価値をつけ
るには何をすべ
きか。まっとう
な生活を送れる
ためにはどうす
べきか考えた」
とみんなに投げ
かけました。



儲かる漁業

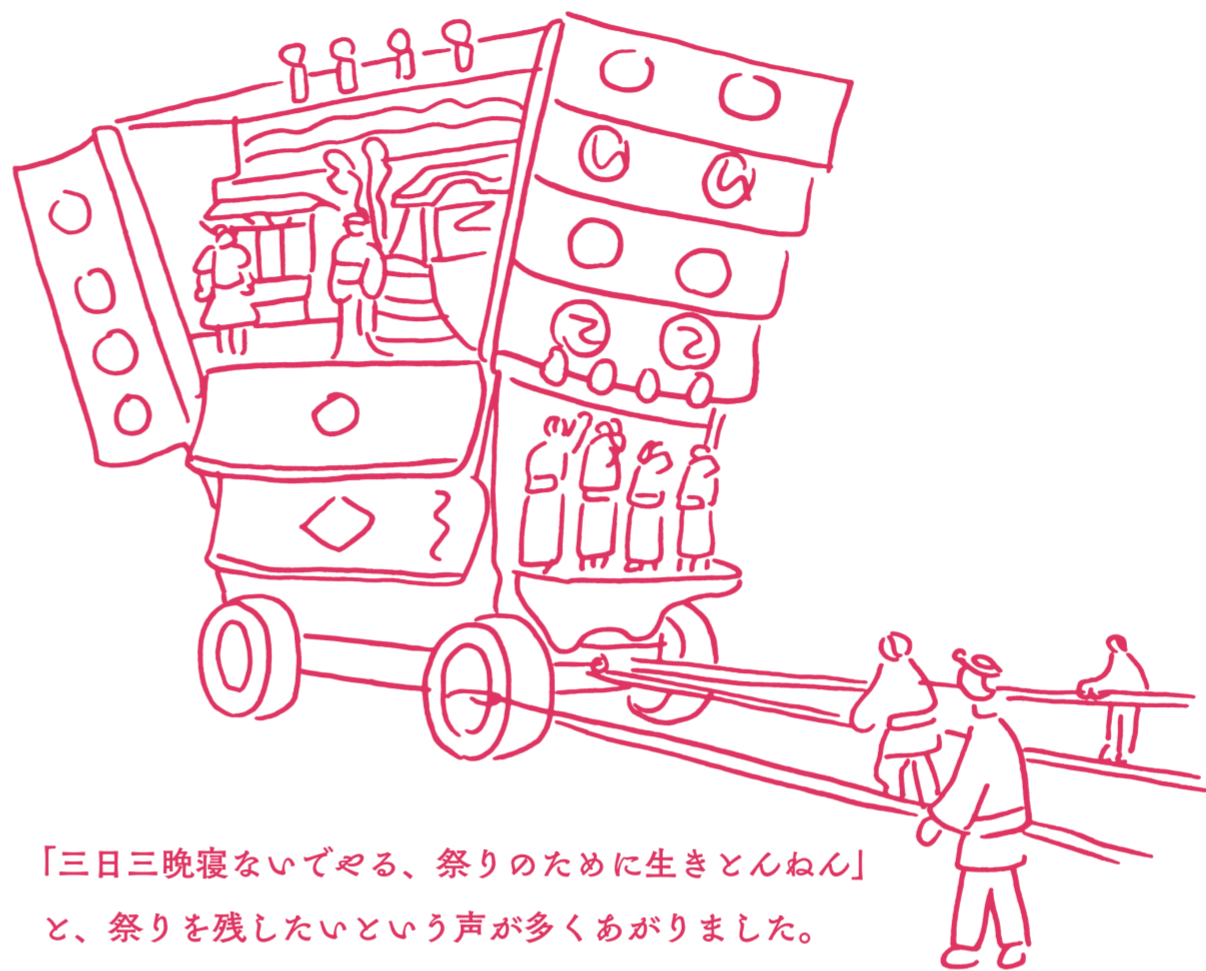
「七尾でも漁師はどんどん減っている、儲かる漁業をする人がもっと増えないといけない」「能登が一次産業で勝負していくんだったら、漁師が経営を学べるような新しい水産高校も必要なのではないか」という意見も出ました。(20代・男性)



祭りがゼロ回になるのは嫌だ

(20代・男性)

2024年は中止が決まった、青柏祭の曳山行事（でかま）。「やることに意味がある。小さくする、でかま動かさなくても…、カタチを変えてでもやっていく必要がある」



「三日三晩寝ないでやる、祭りのために生きとんねん」と、祭りを残したいという声が多くありました。

「片づけた方がいいわいな」と思う

「今朝も、傾いた築100年以上の土蔵の公費解体を申請したいけど債権者探すのに苦労して…」という相談を受けていた。余震と雨風で最近潰れた家もある」と話す、元教員の方も。エリアごとに被害が大きく異なり、田鶴浜など倒壊した家屋も高齢者が多い地域では、みんを戻ってこれるのか不安も大きいようでした。(70代・男性)

本音をしゃべれんと、心がつらくなる

声を出しやす人だけじゃない

(40代・女性)

「声を出しやすい人がここにきているが、顔を出せないうちなど、誰も置していかなくちづくりについて話す方も。少しでも言える人が言っ担」という意見もありました。

土中環境

を見直して、液状化対策を (70代・女性)

七尾に生まれ育って75年という女性は、「人間が地面を固めて、地盤が弱くなったのではないか。昔は土中の水の通り道をつくり水を滞留させないことで、建物が倒れにくかったと聞く。地面の上だけでなく、土の中から見直せないか」と語りました。

ONE NOTO, ONE TEAM

大学生も数名参加。「能登では個々に様々なコンテンツがあるが、災害をきっかけに”ONENOTO”としてインバウンドにおける能登ブランドを構築し、稼ぐ能登をつくりたい。自分も地域資源を売っていきたい」「能登の魅力を外国へ発信するプラットフォームを作成中」と話しました。(20代・男性)

奥能登あってこそ和倉

(40代・男性)

4月によろやく全域が通水した和倉温泉。旅館業を営む男性も「奥能登があってこそ、和倉温泉も成り立つ。地域を超えて連携していきたい。奥能登のハブになれる宿泊施設が和倉にはある」と話しました。



のと未来 トーク

2024.4.20

会場：石川県立七尾高等学校
参加者：66名

関係人口

を映し鏡に、地域の価値を再発見する (40代・女性)

県外に住むも、発災を機に月1〜2回帰ってきている女性は、ずっと住んでいる人には気づかないことが、外から来ると見えるとのこと。「外から来た関係人口を映し鏡にして、地域の価値を再発見していくことが大事では」と話しました。

事業承継 震災前から課題だった

寄棟造りの町家が並び、600年以上の歴史を持つ一本杉通り。しかし後継者がうまく見つからず、閉めるしかないお店が震災前からあったそうです。「震災を機に、事業承継をちゃんと考えていかないといけない」という声がありました。(40代・女性)



食の力で活気を取り戻したい

(40代・男性)

能登島を忘れさせない

(60代・女性)

島へ渡る2本の橋が通行止めとなり、一時は約2400人の住民が孤立状態になった能登島。農家が多く、芋や野菜を持ち寄ってしのいだそうですが、今も農地がひび割れ、民宿や水族館など観光へのダメージも大きいエリアです。「能登島は忘れられてしまうのではと不安になるが、島が発展するようひとつずつ歩いていきたい」と話す方も。



七尾では、被災後すぐに炊き出しを始める有志の料理人も多かったそう。「能登は色が豊か。食でもっと町を盛りあげていかな」と「すぐにお店を再開することは難しいけど、農家や漁師、猟師とのつながりを改めて感じたい」などの声もありました。



国定公園 上手に活かしたい

能登半島の海岸線を中心に石川県4市5町、富山県2市にまたがる能登半島国定公園。日本海によって造られた美しい自然を維持する役割を果たす一方で、公園内の建物のメンテナンスの難しさが課題に。「国定公園内でできそうなこと、難しいことを整理する必要がある」との意見が出ました（40代・女性）



和太鼓 子どもたちへも

(20代・男性)

志賀町の無形文化財である「志賀の太鼓」。毎年、県下太鼓打競技大会が高浜町で開催されています。「若い力でまちを元気にしたい。子どもたちに和太鼓を教えたり、チャリティイベントなども考えている」と話す方も。



原発の存在を避けて 安全・安心の議論はできない

(70代・男性)

2011年から運転を停止している、志賀原発。「今回、道路が崩れて避難経路が全部断れた。原発事故が起きた際、旧志賀町の人金沢に逃げられても、北側の富来町の人には逃げられない」「安定ヨウ素剤を平時から配っておいてほしかった。何かあってからでは間に合わない」「廃炉か再稼働か、そろそろ結論を出すべきでは」との意見が出ました。

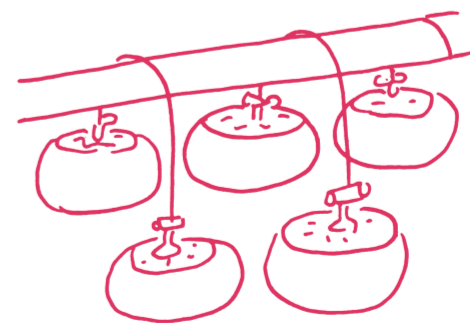


「いつか、だれかが」から、「いま、わたしがへ」
(40代・女性)

4年前に志賀町に移住した女性。「普段は思わなかったのに、今は「何かしたい」と感じてゐる。みんな「何かしたい」「って気持ちが高まっていると思うから、今がチャンスだと思う」と話しました。

自分たちも一緒に、町の
こと考えたい (10代・女性)

「10代が復興に参加できていない。子どもたちは、いま起きていることが理解できていないと思う。自分たちも一緒に新しい町のことを考えたい」と話した高校3年生。将来は看護師になって、町の医療に関わられたらとも思っているそう。



行政のプラン作りを 待ってちゃダメ

(60代・男性)

「話し合いで進めるという文化が、これまで地域で弱かった。行政の一方的なトップダウンではダメだが、住民自ら何かしようという動きも薄い。行政が最終的に責任を持つから、行政を納得させてみんなであらう、というふうにしないといけない」と話す方も。どうやったらみんなで対話の場がつかれるか話し合う姿がありました。

震災で子どもが不登校に… 仕事を休職中

(40代・女性)

発達障害の子どもを育てているという女性。子どもは地震をきっかけに不登校になったそう。現在は休職しており、「復帰できるかわからない」「フリースクールなどが町にない。不登校の子が増えている中で、子どもの面倒を見るために仕事ができない親もいるはず」と話しました。

外の人のしがらみ超えたい 意見で

(30代・女性)

「なにかしたい気持ちがあっても、ここではいろいろ話せても、自分の地域の会長に話すのは難しい」「祭りに外の人も呼びたいけれど、よそ者と呼んだと10年は言われそう…」と地域のしがらみに悩む声も多くありました。「ボランティアや外部の人が来てくれるのはチャンス。外からの意見なら動きやすいのでは」という意見も。

のと未来 トーク

2024.4.28

会場：志賀町文化ホール
参加者：46名



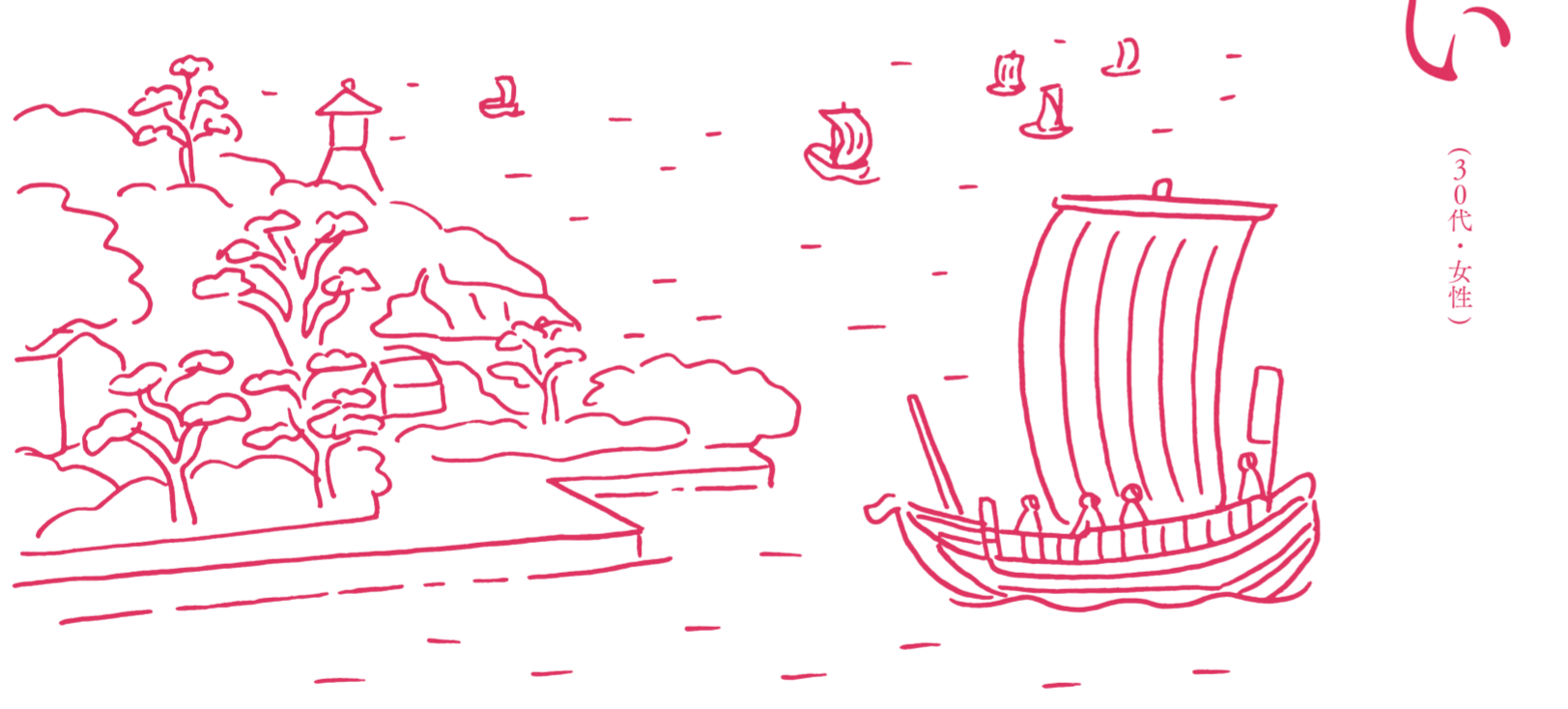
隣近所おってこそ集落

(50代・女性)

社会福祉士として、他の地域から避難してきた1.5次避難所やみなし仮設の方々の相談を受けているという女性。「みんながいなくて戻っても意味がない、隣近所おってこそ集落」と話す方が多い。そのままそっくり戻れないけど集落も心配で、どうするか悩まれている」と現状を話しました。

福浦の歴史 途絶えるかも

(70代・男性)



宝を隠し持っていたい 宝を気持ちも…

(60代・男性)

「田舎の魅力は時間をかけてつくってきたもの。産業や売れる宝にして外に出すのもいいけど、隠し持っていたい気持ちを持つてる人もいる」「能登には平家の落人の集落もあった。ひっそりとひげらかさない気持ちも大事にしたい」と話す人たちも。



「ようやく少しずつ観光客がきているが、少ない」と話す、福浦で暮らす男性。昔は、北前船の寄港地として様々な人が出入りしていた福浦。「歴史があり、祭りをやりたい気持ちもあるが、若者も子どもも減っている。平均年齢が70代では神輿がかつげない」と話しました。

被害が少なく罪悪感 できること探した

「能登のお寺は倒壊したりすごくダメージを受けたけど、自分の寺は少し傾いたくらい。助かってごめんモヤモヤしてる」と話す女性も。他にも「被害格差で罪悪感はある。自分は初日から自宅で過ごせた。平気な分、できることを探した」という声も。(40代・女性)

聖地巡礼や 修学旅行・合宿の場に

万葉集の中で最多の歌を残した大伴家持。「能登には大伴家持が能登國を巡った際に詠んだ歌碑がたくさんある。文学系の聖地巡礼などもできるかも」という案も。「地域外からのニーズを増やすために、修学旅行や合宿の誘致をしては」と話す人もいました。(60代・男性)

金沢に 能登のお魚が減ってる

「市内の飲食店や近江町市場で、能登産の魚を見かけなくなった」と話す人も。金沢の飲食店は能登からの素材に支えられている部分も大きく、漁港と流通が立ち直っていくことが観光客を呼び込む上でも大事そうです。



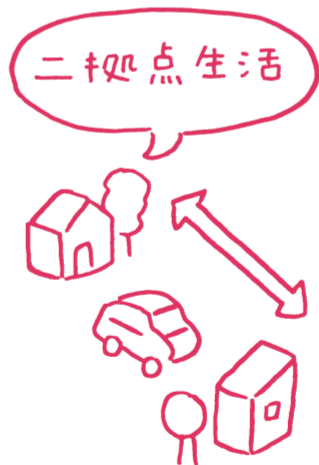
観光客を、 金沢→能登に

「通学で金沢駅を使うと、観光している外国人の方をたくさん見かける。彼らに能登まで来てもらう方法を考えたい。食や文化の体験、地元の人との交流などを融合し、魅力的な長期滞在プランを作れないか」と提案する高校生の姿も。

今はまだ、 ゆっくりやりたい

未来に向けて動く周囲に、まだ気持ちが追いつかない人たちがいます。二次避難中の方を含め、「人の命を守る支援は必要だけど、正直まだ未来について考えられない。ゆっくりやりたい」「1月1日より前の日常に戻りたい。今はそれ以上でも以下でもないなあ」といった声もありました。(40代・女性)

のと未来 トークの 子ども版を



「子どもたちのまちへの思いは大人と結構違う。「マクドナルドを作ってほしい」という高校生も」と話したのは、子ども・若者に関わるNPOの代表。「若い世代の意見は大きい。それがなければ能登は博物館の中の工芸品になってしまう」と語る10代の男性も。

奥能登100% の暮らし、厳しい 気持ちも

「春休みに帰る人もいる中で言いづらいけれど、金沢に避難生活で来てみて、奥能登100%の暮らしはもうできない、厳しいと感じる部分もある」という声も。子どもが倒壊や街並みを怖がってしまったら、悩ましい、と話すお母さんの姿もありました。

骨を埋める人でなく 関連する人 を増やそう

金沢で不動産業を営む50代の男性は「住民票はなくとも能登に定期的に関わる、関係人口と定住人口の間の“関連人口”を増やせば。空き家を活用した地域ならではの景色をつかって、東京の人に2つ目の拠点として選んでもらえる集落にしたい」と語りました。「骨を埋めないとしても、子どもが大きくなるまで住むのに魅力的と思ってもらえることが大事かも」と話す方も。

東京の サラリーマン辞め

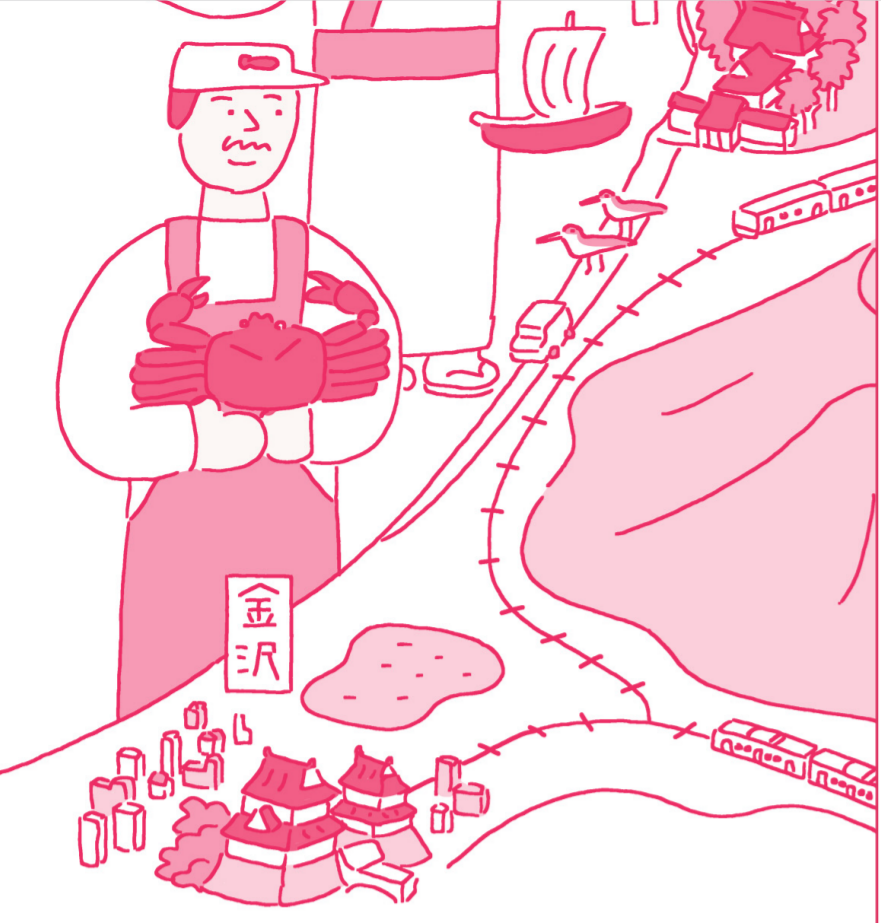
帰ってきた

実家が輪島の洋服店という男性は、東京でサラリーマンとして働いていたものの、震災を機に金沢に帰り、今は金沢と輪島の二拠点生活をしているそう。「都会に出て、全部自分たちでやるのではなく、外に頼った方がいらしることに気づいた。発信を強化していきたい」とのこと。



のと未来 トーク 金沢市

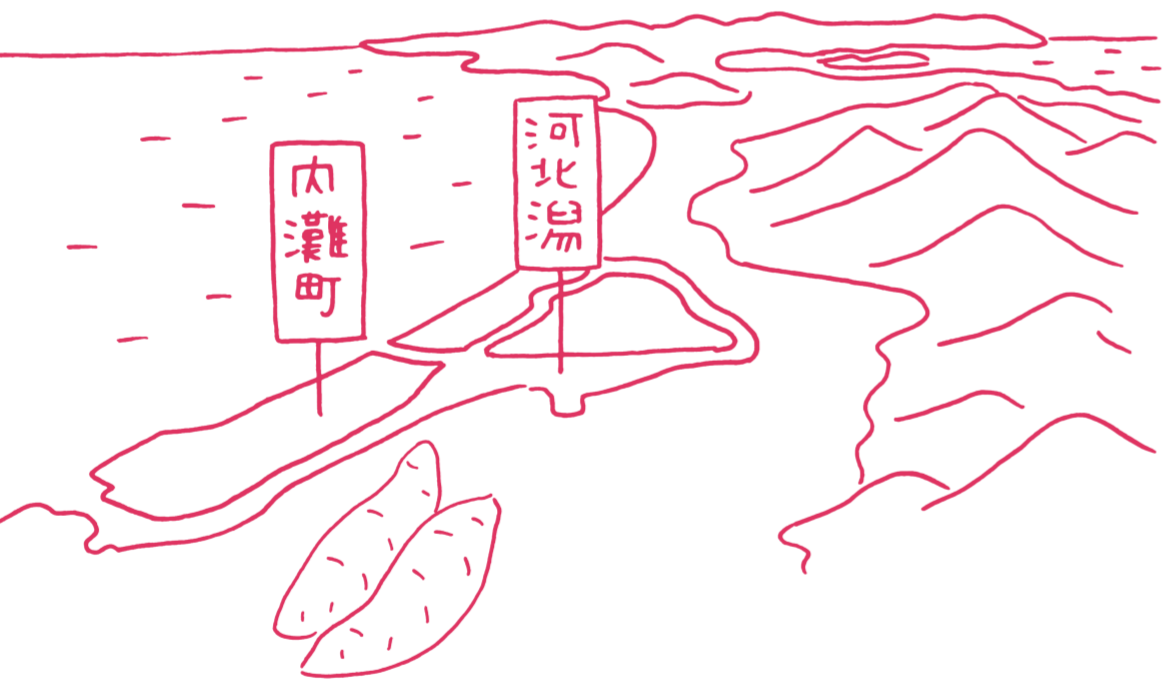
2024.4.29
会場：しいのき迎賓館
参加者：75名



外の人も 家業の継ぎ手に

食や伝統工芸など、さまざまな能登のなりわいの事業継続が危ぶまれている現在。実家で味噌を作ってきた男性は「後継がなくて困っている。外部の人たちを家業に入れていきたい」と話します。事業相談できる場所の少なさと、そもそもの収益の少なさが課題という声もありました。

震度5弱でも 家が倒れた



能登を離れないと決めた

自宅が全壊し、家族を亡くした方も参加。「本当に多くのものを失ったけど、自分は逆に能登を離れないと決めました。必ずまちを復興したい。家族全員が瓦礫の下になったけど、まちの人が助けてくれて命につながった。その人たちに恩返しをしたい気持ちしかない」と話しました。(40代・男性)



自宅が被災した男性は、「古くから住んじマダメと言われていた地域がダメージを受けた。内灘は奥能登ほど揺れなかったが、昔の海と陸の境目が液化化してしまった。50年後を描くには100年前を調べて活かさないといけない」と話しました。

古民家を買って宿をやりようとしている中で被災し、全壊になったという珠洲市の女性。「近所に住んでいた家族は金沢に避難したり引っ越したりしたけど、家族で遊びに来るにもいい場所。絶対にまたあの場所で宿をやりたい」と話しました。(30代・女性)

金沢から家族で遊びに 来てもらえる場所をつくる

「金沢に住んでいるが、母の実家は輪島の朝市で全焼。すぐ行きなかったが邪魔かと思い、2月に行った。光景がショックすぎて復興なんてできないと落ち込んだ。今はようやく気持ちが落ち着いてきた。住めないとしても、二拠点に関わりたい」と参加してくださった方もいました。(40代・女性)